

MAPS 人格投影法と親和欲求との関連性

渋谷 昌三

MAPS (Make A Picture Story) 人格投影法と親和欲求との関連性を検討した。MAPS で使用された画像の種類, 画像数, 画像相互間の距離と親和欲求得点の高低との関係を分析した結果, 次のことが明らかになった。(1)親和欲求得点の高得点者は相互作用の内容を含んだ物語を作った。(2)親和欲求の高得点者は画像数の利用頻度が高かった。(3)親和欲求の高得点群では, 子ども画像と女性画像間, 子ども画像間, および動物画像間の距離が短くなる傾向があった。

キーワード: MAPS 人格投影法, 親和欲求

I 親和欲求再考

1. 親和欲求の定義

Murray (1938)¹⁾によれば, 親和とは「自分の味方になってくれる人, 自分に似ている人, 自分に好意を持っている人などに接近し, すすんで協力し, 好意を交わし合うこと。関心を持っている対象の愛情を満足させ, それらを勝ち取ること。友と離れず, 忠実であること」である。

この定義を参考にしつつ, 従来の研究を整理したところ, 便宜的に次の3つに分類することができた。

(1) 対人関係の調整機構としての親和欲求

Argyle & Dean (1965)²⁾は親和葛藤理論を提唱している。この理論の中では, とくに, 視線には相手に接近する力 (approach force) と相手から回避する力 (avoidance force) があると考えられている。接近する力はフィードバック欲求と親和欲求を表している。一方, 回避する力は見られることへの恐怖, 相手の拒絶反応を知ることへの不安を表している。

このうち, 親和欲求は視線の接触によるだけではなく, 身体的な近接さ, 話題の親密さ, 笑いの量などの諸要素とも関連している。親和葛藤理論によれば, 相互交渉の状態にある二者の親密さは, これらの諸要素の均衡作用によって一定の水準に保たれるのである。

たとえば, この均衡状態が崩れて親密さが増加する方向に傾いた時, しかも相手が現在以上の親密な関係を望まない時 (すなわち, より強い親和欲求を持たない状態を意味する), その相手は「拒絶されることや自分の内面を過剰に露呈することへの不安」を持つようになる。これとは反対に, 親密さが低減する方向に均衡が崩れた時, 相手は親和欲求が満たされなくなり, フラストレーションに陥る。

こうした考え方から, 親和欲求の強さがお互いの親密さの程度を決める一要因になっていることや, 親密さの均衡を保つ錘の役目をしていることがわかる。換言すれ

ば, 親和欲求の有無や強弱が対人関係の調整に関与しているわけである。

(2) 状況要因からみた親和欲求

Schacter (1959)³⁾は, 電気ショックという不安状況での人の行動を実験的に調べている。この研究では, 高い不安状況に置かれた女子大学生は, 低不安状況に置かれた場合より, より多くの親和行動を示した。その他の研究を総合すると, 一般に, 不安や恐怖を伴う状況に置かれた人は, 直接的な不安低減を求めたり, 自己評価を確認したりする動機が高まる。その結果として, 親和欲求が触発されるので, 親和行動が促進すると考えられている。

要するに, 親和欲求が生じたり, あるいは, 親和行動が起こったりするのは, その人を取り巻く環境要因 (たとえば, 不安や恐怖の存在) に左右されるというわけである。

(3) 個人特性としての親和欲求

第1に, 出生順位と親和欲求の関係が見いだされている。たとえば, 次のような研究がある。①第一子は親和欲求が高い³⁾。②とくに長女の親和欲求が高い⁴⁾。③出生順位にかかわらず, 女子だけに高い親和欲求が見られる⁵⁾。逆に, ④ひとりっ子の親和欲求は低い⁶⁾。

第2に, 人格投影法の作話内容に親和欲求の反応が見られる。親和欲求の個人差はTAT (主題統覚検査)¹⁾の作話内容の分析を通して明らかにされている。親和欲求の分析基準は次のようなものである。

① Shipley & Veroff (1952)⁷⁾は, 拒否への恐れを親和欲求の手がかりと考えている。たとえば, 物語の内容に「ある人が他の人からの分離を心配している」という事柄が含まれている時, そこに親和欲求が表現されていると解釈されている。

② Atkinson たち (1954)⁸⁾は, 親和への期待を強調する一方, 拒否への恐れをこれに含めている。たとえば, 物語の内容に「一人またはそれ以上の人物との間で, 友好的な関係が確立したり, 持続していたり, または回復したりすることに関して, 関心を持っている」ことが認められた時, 親和欲求が表現されていると解釈されている。

以上のように, 親和欲求の定義を考える際, いくつかの視点がある。ところで, Wrightsman (1968)⁹⁾は, 親

和欲求とは「他の人と一緒にいたいとの欲求 (the need to be with other people)」との総括的な定義を提唱している。

そこで、本研究では、ここで紹介した考え方を考慮して、便宜的に、「親和欲求とは、特定の状況で、他人を求め、一緒にいたいと願う特性」と考えることにした。

2. 親和欲求の問題点

(1) 親和欲求研究の視点

親和欲求に関する諸研究から、次の3つの視点が指摘された。

第1の視点は、対人関係を調整する手段として、親和的な行動が関与している、ということである。先述した通り、相互の親密さは、視線の接触量や頻度、対人間の距離などで調整されており、その結果として親和欲求の充足が図られていると考えられる。

第2の視点は、親和的な行動は状況の要因に左右されている、ということである。親和欲求の必要性は自分が置かれているその時々状況に応じて変化すると考えられる。

第3の視点は、親和欲求は個人特性の一つである、ということである。この特性は人格投影法の作話内容に表現されると考えられる。

(2) 親和欲求研究の方向性

第1の視点(視線と距離の問題)は、MAPS人格投影法で使われた各画像の方向及び画像間の距離と親和欲求の強さとの関係を通して確かめることができると考えられる。

第2の視点(状況要因)は、MAPS人格投影法における背景は個々の状況要因とみなすことができるので、これらの背景と親和欲求との関連性から明らかにすることができると考えられる。

第3の視点(個人特性)は、MAPS人格投影法における作話内容の分析を通して把握することができると考えられる。

II 研究目的

MAPS人格投影法の作話内容、使用された画像数及び種類、画像間の距離と、親和欲求得点との関連性を検討する。

第1に、親和欲求の高低とMAPSにおける作話内容の違いを比較、検討する。とくに、対人的相互作用の有無、自分と他者とのかかわり方の特徴などに重点を置いて分析する。

第2に、親和欲求の高低とMAPSにおける画像数の多少、画像の種類、画像間の距離との関連性を検討する。

III 方法と手続き

親和欲求の高低は、EPPS性格検査 (Edwards Personal Preference Schedule)¹⁰⁾の中の「親和尺度」の得点を利用した。

対人関係における体験内容を調べるためにMAPS人格投影法 (Make A Picture Story Method) を使用した。この投影法は、Schneidman (1947)¹¹⁾がMurray (1938)¹²⁾のTAT (Thematic Apperception Test) を参考にして考案したものである。この検査法は、TATの中の人物像を背景の絵から引き離すという発想から生まれた。その結果、被験者自身が個々の背景に応じて人物像などを自由に置く機会を持つことができるようになった。なお、詳細については渋谷(1989)¹²⁾が参考になる。

MAPSは22の背景から構成されているが、本研究では5背景を使用した(図1参照)。この5背景は、台(1975)¹³⁾の研究を参考にして、大学生が日常生活の中で体験する可能性が高い場面(明瞭に構成化されたもので、①居間、②街路、③教室の背景)と空想的な場面(準構成的なもので、④森、⑤風景の背景)から成っている。これらの背景を①~⑤の順に提示した。画像(人物画像65個、犬と蛇の画像各1個)は全部使用した。背景及び画像は立体的な配置で使用した。

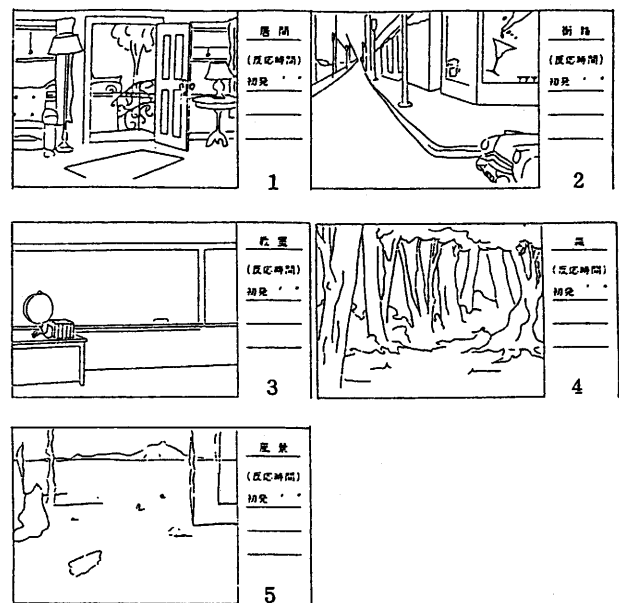


図1 MAPS で使用した背景の縮図
(MAPS 研究会・日本心理適性研究所 訳編
1975年 日本文化科学社発行より引用)

画像の位置は、背景の手前にあるB4版の白紙上に配置された画像立ての位置に印をつけることにより記録された。また、同時に、画像の種類と方向がこの白紙上に記入された。MAPSの作話内容はテープレコーダーに録音され、後に、記録用紙に転記された。

被験者は男女大学生30人だったが、このうち6人はEPPS性格検査未回収、MAPSの作話内容不明等の理由で削除した。最終的に、男子8人、女性16人が分析対象となった。

表2 語り手の関係体験の別

背景	1 居間		2 街路		3 教室		4 森		5 風景		Total	
	全体性	同一視	全	同	全	同	全	同	全	同	全	同
H-gr.	12	2	12	2	10	4	7	7	11	3	52	18
L-gr.	8	1	3	6	3	6	3	6	3	6	20	25
			p=.015 ^a		p=.073 ^a				p=.037 ^a		p<.005 ^b	

a) 直接確率計算法による b) $\chi^2=10.419$

表3 相互作用の有無

背景	1		2		3		4		5		Total	
	H-gr.	L-gr.	H	L	H	L	H	L	H	L	H	L
相互作用あり	11	7	9	1	12	3	11	5	11	5	54	21
なし	3	2	5	8	2	6	3	4	3	4	16	24
			p=.016 ^a		p=.016 ^a						p<.001 ^b	

a) 直接確率計算法による b) $\chi^2=11.215$

IV 結果

1. 親和欲求の高低

EPPS 性格検査の「親和尺度」だけの得点をパーセンタイルに従って分類した結果が表1である。以下の分析では、親和得点のパーセンタイル50%以上の被験者を高親和群(H-gr.)、同様に、50%以下の被験者を低親和群(L-gr.)に分けた。

表1 EPPS 性格検査「親和」パーセンタイルと被験者の内訳

Aff. > 75%	9人		
75% > Aff. > 25	8	H-gr. : Aff. > 50%	15人
Aff. < 25	7	L-gr. : Aff. < 50	9

2. MAPS 人格投影法の作話内容

MAPS 人格投影法で得られた物語の内容について、とくに、対人関係の特徴から検討した。

(1) 語り手の関係体験

語り手の関係体験は、台(1981)¹⁴⁾に従って、「背景に画像を配置して、全体的状況を描写したもの(以下、全体性と呼ぶ)」と、「語り手が特定画像に同一視して活動し、状況を発展させたもの(以下、同一視と呼ぶ)」の2つに分類された(表2)。

その結果、高親和群は低親和群より、全体的状況を描写した作話内容が多いことが分かった。とくに、街路、教室、風景の各背景において、その傾向が顕著だった。

(2) 相互作用の有無

人物画相互の間に対人相互作用に関連した内容が物語られているか否かについて分類した(表3)。なお、表3

の中で、「相互作用あり」とは、作話内容に人物画相互の間に何らかの交流を意図する表現が認められる状況を指している。

その結果、高親和群は低親和群より、相互作用の内容を含んだ作話の多いことが分かった。とくに、街路と教室の各背景において、この傾向が顕著だった。

(3) その他

作話内容の描写に関して、その物語の展開を客観視する内容のものは、高親和群により多く見いだされた(直接確率計算法により、 $p=.0075$)。

3. MAPS 人格投影法で使用された画像数及び画像の種類

(1) 背景間の相関

画像数及び画像間の距離について相関を求めた(表4)。選択された画像数について、街路と教室の間に相関

表4 背景間の相関

(A) 画像数

背景	1	2	3	4	平均	SD
1					2.8個	.942
2	.262				3.6	1.602
3	.245	.491			3.8	2.409
4	-.071	.106	.094		3.2	1.135
5	-.137	-.031	.113	.176	2.8	1.553

(B) 距離

背景	1	2	3	4	平均	SD
1					112.9mm	40.375
2	.323				119.1	45.227
3	-.187	-.310			103.9	50.545
4	.179	-.156	.336		120.3	38.964
5	-.216	-.024	.071	.039	100.8	58.983

が見られたが、全体的に相関は低かった。

(2) 親和欲求と画像数

居間の背景での画像数は、高親和群の方が低親和群より少ないことが分かった(表5)。また、高親和群では、居間、街路、それ以降の順に、画像数が増加する傾向がみられた($t=2.976, p<.01$)。全体的に見ると、それぞれの背景ごとに、平均2~4個の画像が用いられていた。

表5 背景ごとの画像数(個)

背景	1	2	3	4	5
平均	2.4	4.0	4.0	3.4	3.0
H-gr. SD	.879	1.751	2.394	1.143	1.789
N	15				
平均	3.4	3.0	3.4	3.1	2.4
L-gr. SD	.831	1.054	2.216	1.099	.955
N	9				
t-test(両側)	$p<.02$				

(3) 背景別の画像間距離

画像間の距離に関しては親和欲求の高低との間に差異は見られなかった(表6)。全体的に見ると、平均100~130mm前後の距離で画像を配置しているといえる。

表6 背景ごとの距離(mm)

背景	1	2	3	4	5
H-gr. 平均	105.4	107.1	96.3	113.5	100.3
SD	38.995	41.488	48.728	31.018	57.610
N	15				
L-gr. 平均	124.9	138.9	116.7	131.4	101.6
SD	39.093	44.245	50.902	47.376	61.180
N	9				

(4) 画像の種類を選択傾向

高親和群は低親和群より、子ども画像をより多く選択する傾向があった(選択比6対4)。同様に、動物画像をより少なく選択(選択比3対7)する傾向がみられた。

(5) 画像ごとの距離

高親和群は低親和群より、子ども画像と女性画像間、子ども画像と子ども画像間、子ども画像と動物画像間の距離が、それぞれ短かった。

被験者の性差を考慮したところ、次の結果が得られた。

表7 画像ごとの距離(mm)

画像の組合せ	男一男	男一女	女一女	子供一男	子供一女	子供一子供	子供一動物	子供一少数民族
H-gr. 平均	125.0	115.1	133.2	110.9	98.6	91.8	63.6	129.2
SD	67.918	52.452	74.475	59.791	42.242	48.118	26.443	34.618
N	22	41	12	28	14	118	21	15
L-gr. 平均	142.5	119.3		126.8	158.8	123.6	164.5	89.3
SD	46.041	45.720		47.873	94.422	55.546	63.579	29.881
N	9	12		19	14	39	8	6
					$p<.05$ (Welch)	$p<.01$ (t-test 両側)	$p<.001$	

①男性の被験者で、高親和の者は低親和の者より、男性画像と子ども画像間の距離が短かった($t=2.736, p<.02$)。②女性の被験者で、高親和の者は低親和の者より、女性画像と子ども画像間(Welch, $p<.05$)、子ども画像と子ども画像間($t=3.119, p<.01$)の距離が短かった。

V 考 察

親和欲求の高低とMAPS人格投影法によって得られた作話内容及び画像の使い方との間には、次のような特徴が見いだされた。

1. MAPS人格投影法の作話内容

(1) 親和欲求の高い者は低い者より、作話内容は全体的な状況描写が多く、相互作用の内容を含んでいるものが多かった。とくに、街路と教室の背景において、この傾向が顕著だった。

一般に、街路と教室の背景は対人的コミュニケーションが描写されやすい場面である。さらに、これらの背景では使用される画像数が相対的に多くなる。こうした背景の特色を考慮すると、親和欲求の高い者は、街路や教室といった公共の場で、より多くの人が会話をしている状況をイメージしやすいと考えることができる。

(2) 作話内容と背景との関係から、親和的な作話内容が描かれやすい背景とそうでない背景があると考えることができる。

2. MAPS人格投影法の画像選択

(1) 親和欲求の高い者は低い者より、居間の背景で画像数が少なく、それ以外の背景で画像が急増している。ただし、親和欲求の高い者は、相互作用の有無に関して、居間の背景とそれ以外の背景との間で差異が認められなかった。

これらの点から、親子関係などの対人関係が描写されやすい居間の背景では、親和欲求の高い者は「少人数の人と、より個人的な会話をたくさんする」というイメージを持っていると考えることができる。

(2) 親和欲求の高い者は、居間の背景から街路の背景に移った時点で、画像数が増加した。これは、親和欲求の高い被験者のMAPS人格投影法に対する態度を示すものである。たとえば、親和欲求の高い者は、「公的場面で

は、より多くの人と表面的な対人関係を持ちたいと望んでいる」と考えることができる。

3. MAPS 人格投影法の画像間の距離

(1) 親和欲求の高い者は低い者より、子ども画像と女性画像間、子ども画像と子ども画像間、子ども画像と動物画像間で、それぞれの距離を短くしていた。Proxemics からすると、相互間の距離が短いことは親密であることを意味している (Hall, 1966)¹⁵⁾。こうした点から、親和欲求の高い者は、女性と子ども、そして動物により親密な感情を持っていると考えることができる。

(2) 画像間の距離については性差が見られた。親和欲求が高い者のうち、男性では男性画像と子ども画像間の距離が短かったが、女性では女性画像と子ども画像間の距離が短かった。つまり、親和欲求の高い男性と女性は、それぞれ子どもにより親密な感情を持っていると考えることができる。

以上の考察により、対人関係における親和欲求は MAPS 人格投影法を通してより具体的に把握できることが示唆された。

引用文献

- 1) Murray, H. A. (1938) Explorations in personality. Oxford University Press.
- 2) Argyle, M. & Dean, J. (1965) Eye-contact, distance and affiliation. *Sociometry*, 28 : 289-304.
- 3) Schachter, S. (1959) The psychology of affiliation. Stanford University Press.
- 4) Gerard, H. B. & Rabbie, J. M. (1961) Fear and social comparison. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 62 : 586-592.
- 5) Darley, J. M. & Aronson, E. (1966) Self-evaluation vs. direct anxiety reduction as determinants of the fear-affiliation relationship. *Journal of Psychology, Suppl.*, 1 : 66-79.
- 6) Connors, C. K. (1963) Birth order and needs for affiliation. *Journal of Personality*, 31 : 408-416.
- 7) Shipley, T. E., Jr. & Veroff, J. (1952) A projective measure of need for affiliation. *Journal of Experimental Psychology*, 43 : 349-356.
- 8) Atkinson, J. W., Heys, R. W. & Veroff, J. (1954) The effect of experimental arousal of the affiliation motive on thematic apperception. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 49 : 405-410.
- 9) Wrightsman, L. S., Jr. (Ed.) (1968) Contemporary issues in social psychology. Books, Cole.
- 10) 肥田野直 他 (訳) (1970) EPPS 性格検査. 日本文化科学社.
- 11) Schneidman, E. S. (1947) The Make-A-Picture-Story (MAPS) Projective Personality Test. *Journal of Consulting Psychology*, 11 : 315-325.
- 12) 渋谷昌三 (1989) MAPS 人格投影法と顕在性不安検査 (MAS) との関連性～個人空間 (personal space) からの分析. *山梨医大紀要*, 6 : 29-33.
- 13) 台利夫 (1975) MAPS 人格投影法. 日本文化科学社.
- 14) 台利夫 (1981) MAPS による関係体験の比較文化的検討. *筑波大学心理学研究*, 3 : 17-23.
- 15) Hall, E. T. (1966) The hidden dimension. Double day and Company.

Abstract

Relationship between MAPS and Affiliation need

Shozo SHIBUYA

The relationship between MAPS (Make A Picture Story) and affiliation need was investigated. Detailed analysis of the relationship between MAPS and affiliation need (namely, the kind and number of the figures used for MAPS and the mutual distance between the figures versus the level of affiliation need scores) produced the following results. (1) Subjects with high affiliation need scores were found to make a story of human relationship on MAPS. (2) Subjects with high affiliation need scores were found to use a large number of figures on MAPS. (3) In a group with high affiliation need scores, the distance between the figure of females, children and animals (dog and snake) and that of children tended to become shorter than the distance between the other figures on MAPS.